
待ち合わせ

蒼 しょうこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
待ち合わせ

【Nコード】
N4835E

【作者名】
蒼 しょうこ

【あらすじ】
どうしてうまくいかないんだろう？彼との久々の待ち合わせは、うまくいかないー。

どうして誰かを傷つけてしまうんだろう。
どうして、私が泣くなら誰かも泣くって思えないんだろう。

じりじりと陽が照り付けていた。

6月だというのに、もう真夏みたいだ。

梅雨を通り越した気配もないし、このまま世界は暑くなっていく一方だ、と思う。

彼を待っていた。

思い返せば、出逢って半年になる。

あの頃と私は、少しは変わっているのだろうか？

☆

☆

☆

今日は、十二時に彼の最寄り駅で待ち合わせだった。

いつも私は待ち合わせの時間に遅れてしまうので、今日こそ早く出よう、と大慌てで家を出た。

ぎりぎりの電車に乗り込み、奇跡的に十二時ぴったりに電車は駅に着いた。

我ながら偉いと思った。

携帯を見ると、メールが入っていた。十一時五十四分の着信だ。

”今どちらに見えますか？ 僕はドームに来ていて、やや遅れそうです。先に野上に着いたら喫茶店で待っててもらっていいですか？”

2週間ぶりに会う今日は、いつもより早い時間からの待ち合わせだった。

今日は彼は一日空いているのだろうか。

普段寝てない分、休日に多めに寝ているようだから、もしかして寝坊して私の方が早く着くかも、と勝手に想像してわくわくしていたので、少し落胆した。

”了解しました。”と返信して、久しぶりに降りた野上駅をまじまじと見渡した。

降り立つ人が彼のご近所さんなんだ、と思うと何だか嬉しくなる。

我ながら単純だ。

駅近くの喫茶店は外から覗き込むと空いていて、休日の田舎の風景、という感じだった。

いつも一人で喫茶店には入らないので何だか気が引けて、近くのコンビニまで歩いていった。

冷房が効いていたけど、真夏ほど強烈ではなくて、私にはちょうど良い風だった。

喉が渴いていたのでお茶を選んでコンビニを出る。
街頭スタンドの、無料の求人雑誌とインテリア雑誌をとって歩き出す。

駅の周りには他に立ち寄れそうな店もなく、ふと時計を見ると十二時二十分だった。

そろそろいい時間だろうと喫茶店の前で連絡を待ってみる。じりじりと暑くて体力が奪われていく。

喫茶店に入ったほうがいいのだろうか。

特に食べたいものもないし、もったいない気がする。
でも彼が来た時に喫茶店の中にいた方が、ちょっと坐って話ができる。いいかもしれない、そう思って喫茶店の中に入る。

オレンジジュースを頼んでカウンターの端に坐る。

カウンター後ろの座席を見ると、スーツ姿のカップルが話している。
仕事仲間といった感じだ。スーツは就職フェア以外で着ていないので、新鮮にうつる。

土曜も仕事なんて大変なんだな、と思うと携帯が震えている。彼からだ。

「もしもし、川島さんですか？」

「はい。」

「すいません。今から出るんですけど、ちょっと三十分から、最悪一時間ほどかかってしまうかもしれません。ごめんなさい。」

「じゃあ、一時間後に着くって思っておけば確実ですね？」

「……怒ってますか？ ごめんなさい。」

「……怒ってないですよ。じゃあ、一時間後に。」

怒っているかって聞かれたら、怒ってないです、って答えるけど、軽くいらいらしていた。

いつも遅刻してくる側のくせに、待たされるのは嫌いだった。

でも、こうして連絡をくれたのだし、あと一時間なら時間を潰せるだろう。

時計を見ると、十二時四五分を指している。あと一時間、何をしよう？

さっきとったインテリア雑誌をぱらぱらとめくる。

無料にしては綺麗な写真が載っていて楽しいのだが、薄いのですぐに読み終わってしまう。

オレンジジュースもすぐに飲み終わってしまい、手持ち無沙汰で店を出る。

焦って家を出たのでいつも持っている音楽プレイヤーもない。

携帯をいじるのも何だか飽きてしまっていることがない。

久々に来た野上駅をぶらぶらと散策することにする。

最後に彼の家に来たのは去年の冬だった。久々の町並みが懐かしく感じる。

もうすぐ彼がきたら、一緒に彼の家まで歩く、そう考えるだけでわくわくする。

ちゃんと覚えているか確かめたくて、彼の家までの道をおさらいしてみる。

どこで曲がるんだったか分からなくて、行き過ぎてしまう。

土曜の昼間なので、道ばたでお父さんと子供がキャッチボールしている。

静かな街に楽しげな声が響く。そのうち散策も飽きて彼のマンションの前で立ち止まる。

もう疲れて歩けそうもない。

時計は一時二十分を指している。約束の時間まであとちょっと、あとちょっとで会える。少しだるくて、マンションの駐輪場の端に座り込む。

帽子もかぶらず炎天下を歩いた不注意な自分にいらいる。

でも、あとちょっとだから。

彼からはさっきの電話以降連絡はない。

正確にいうと、一時二分に彼からの着信があったが、電話に出ると2秒で切れてしまった。

何だか怖くてかけ直す事ができなかった。

今日どうしてドームにいるのかも聞いていない。

彼は私と違って多忙な人だ。

よくは分からないけど、SEという仕事をしていて、なおかつ働きながら大学に行っていて、最近は独立しようか迷っている、とか、友達の会社の立ち上げを手伝っている、とか、私には遠い世界の話をしていた。

揉め事の仲裁をしたり、友達とイベントを企画したり、ビジネスのお手伝いをしたり、また時には姪っ子の世話もしたり、とにかく忙しそうだった。

きつと今日も大事な用で大変なんだろうな、と思って、電話をかけるのも気が引けてしまう。

もしかして事故でもあったんじゃないだろうか、それとも何か揉め事か、きつと深刻な理由があるのだろうか、と思う。

時計は一時四四分を指している。最後に彼と話してからちようど一時間後だ。

でも彼からは特に連絡がない。少し不安になってくる。彼に何かあったらどうしよう。

日陰に坐ってさっきコンビニで買ったお茶を飲んでも、頭がぼうつとしたままだ。

マンションの向かいの一軒家の前で、自転車にまたがった少年達が何か楽しそうに話している。彼らも待ち合わせだろうか？

私はよくこうして道ばたに座り込んでしまう。

それは、もう待つのが疲れたの、と周りにアピールしたいからだ。彼が来た時に、立って待っているよりこうして座り込んでいた方が、哀れな感じがすると思ったのだ。自意識過剰なのかもしれない。

こうして道ばたに坐る私を、少年たちはどう思っているだろうか。待ち合わせをしていると思うだろうか。

もしかしたら、家に入りたいのに鍵をなくして、家族が帰るのを待っている風にうつっているかもしれない。

別にじっと見られた訳でもないのに、ぐるぐると想像してしまう。でもその少年たちも、しばらくするとどこかに行ってしまった。

私は取り残された。

ふと見ると、服に虫がついている。無造作にはらいのける。

彼と会う時、私は毎回遅刻していた。

それは、服を選んでたら遅刻しました、という馬鹿げた理由で、だ。家を出なきゃいけない時間が迫っているのに、どうにもさまにならない、と服をとつかえひっかえしてしまふ。

いつも彼を待たせてばかりで、怒られた事はないけど、いい加減呆れられてしまふ。

そう思つて今日はいつも以上に焦つて家を出た。

服は、この前買ったものを着ていこうと決めていたので、そんなには時間はかからなかつた。

真っ青なワンピースをショッピングモールで見つけて、彼が何と言つてくれるか、想像しながら買った。

今日の待ち合わせが決まつてから、ずっと彼に会いたかつた。

早く新しい服を着た私を見て欲しがつた。

いつも服を選んでいて遅刻してしまふ、と言うと、しょうがないなあ、という風に笑つてくれる彼の顔が浮かぶ。

でも今日は時間通りに着いたよ？

しかし、今日はなんて暑いんだろう。

青いワンピースはポリエステル製で、嫌な汗が背中を流れていく。久々に外出したので余計にそう感じるのかもしれない。仕事を辞めてから、家にこもることが多い。その日が暑いのか寒いのか、あまり考えもしなかつた。

どうして私はここに座っているんだろう。喫茶店でもっと粘ればよかったのかな。

でも青いワンピースは動きづらいし、喫茶店の椅子は硬くて、何だか凄く居心地が悪かったのだ。

私は待つのが苦手だ。どうもうまくできない。できなくていらいるする。

先ほどまでいた少年たちが行ってしまつて、道を歩く人も殆どいない。

私だけがここで待ちぼうけをくらっているのだ。途端に寂しくなってくる。

もう彼はこないんじゃないだろうか。そんな想像をしてしまう。きっと事故にあったんだ。今頃病院にいるかもしれない。でも私には知る術がない。

彼と私をつなぐのは、携帯の番号とアドレスだけだ。

掲示板で知り合った私たちには共通の知り合いがない。

ここで待つより、どこか別のところへ行くべきなのだろうか。

ネットカフェでそれらしきニュースでも検索した方がいいのかもしれない。

そんなことを考えては、あり得ない、と頭の中で打ち消す。立つのも億劫でじっと座り込んだままだ。

彼が来たのは、二時半だった。指定の時間から三十分後だ。

私はトイレに行きたくなくてコンビニにいた。
トイレの中で携帯がなるけど、まさかとの訳にもいかず放置する。
何だかタイミングが悪い。

次にかかってきた電話で話して、彼のマンションまで戻った。
白いタンクトップが視界にうつる。

どうして私はこんな風に歩いているんだろう。
久々に彼に会うのに、何でこんなことになったのか分からなくていらいる。

十二時に待ち合わせだったのに。
もしかしてお昼も一緒に食べれるかもしれない、と勝手に期待していた自分が馬鹿みたいだ。謝る彼の顔が見れない。

「ごめんなさい。怒ってますよね？」
どう返答していいのかわからない。
怒ってるけど、いつも遅れてくるのは私だし、何も責められない。
ただ黙りこくってしまう。

彼がエレベーターのボタンを押して、二人で無言で乗り込んだ。
こんなことで怒るなんて馬鹿げてる。だって私が遅れてきたって彼は何も怒ったりしないのだから。
そう言い聞かせるけど、何を喋ったらいいかわからない。
どうにもしがたくて部屋を飛び出してしまった。

彼が後ろから声をかけてくる。

「帰るんですか？」

「帰ります！」

さっきよりは幾分か日差しが和らいだ道を、怒りに任せて足早に通り過ぎる。

駅までいくのが面倒くさくて、マンションが見えなくなった辺りの駐車場に座り込んでしまう。

帰りたいわけじゃない。今日のために買った青いワンピースはきつと汚れてしまってる。頭がずきずきする。追いかけてきて欲しい。それだけだった。

このまま、少し歩いていけば駅に着く。
電車に乗って家に帰る。飛び出してしまったのだからそうするべきだろう。

でも私は立つことができない。

帰りたい訳じゃない。

彼を振り回したい。彼に追いかけてきてほしい。
こんなことを願う私は何て幼稚なんだろう。自分が恥ずかしくなる。
でも、飛び出さずにはいられなかった。

彼に追いかけさせるなんて、間拔けな事をさせたくはないのに。
こんな風に幼稚な私を見せたい訳じゃないのに。

さっきから携帯が震えている。彼からだ。

とる気になれずに放置すると、留守電サービスに転送されていく。

そのうち電話もかかってこなくなる。

時計を見ると、飛び出してから三十分くらいだ。

もうかけてきてくれないのだろうか、寂しくなる。素直に彼の部屋
に戻ればいいのに。

ここにいるのも辛いし、このまま彼に会わずに帰るのも嫌だ。
でも、怒りはおさまらない。どうしたらいいかわからない。

彼からのメールは2件だった。

”すみません。今日は追いかけていく元気がないです。”

”よかったら連絡下さい。”

それと留守電の伝言が1件。何だか疲れきっているような声だ。
私が余計に疲れさせているのは間違いない。

またいらいらしてくる。もう電話もかけてこないくせに。

” なんだか馬鹿にされてる気がして、どうも無理です。

別に今日のような状況で会いたくはありませんでした。待った私が馬鹿でした。”

怒りに任せて返信する。

違う。こんなことが言いたいんじゃない。

彼の番号にワン切りする。

彼と話したい。でも、話す自信はない。怖くて切ってしまう。

私は自分から電話をかけるのが苦手だ。何だか相手に負けた気分になってしまうから。

いつもかけてくれるのを待ってしまう。

彼は、すぐ折り返してくれた。

「連絡くれて、ありがとうございます。今日は本当にすみませんでした……。」

疲れた彼の声が受話器から静かに響く。

「別に……。」

「今、どこにいるんですか？」

「駅近くです。」

何を言ったらいいかわからない。

「川島さんは帰りたいですか？僕は、このままお別れするのは嫌です。」

私も嫌です。

でも、そう言えない。

「……どうしたらいいかわからないんです。黒川さんは、どうしたらいいと思いますか？」

「僕も分らないです。川島さんはどうしたいですか？」

「……わからないです。」

「……そうですか、とにかく、会って話しましょう。」

「……でも、顔見るといらいらするし、何話したらいいかわからないし。」

彼の口調が、少し早くなる。

「僕も分らないですよ、でも、二人してわからない、わからない言ってもしょうがないじゃないですか。できる事からしていかないと。……近くに何が見えますか？」

「マンションからすぐ近い所の交差点です。」

「迎えに行くので、何か目印になるものがありますか？」

「本当にすぐ近くなんで……、自分で戻るんで待って下さい。」説明するのが面倒くさくて、そう告げて電話を切った。

何て私は間抜けなんだろう。

自分で飛び出してって、また自分から戻るなんて。

なんで私はこんなに馬鹿なんだろう。そう思いながらのろのろと立ち上がる。

彼はどう思っているんだろう。

どうして疲れているのに、私の相手をしてくれるんだろう。

彼は、マンションの前で待っていてくれた。
またさっきと一緒に無言でエレベーターに乗り込んで、彼の部屋に入る。

彼がオレンジジュースを出してくれる。

「今日は本当に遅れてすいません。言い訳になっちゃうんですけど、実は……。」

「聞きたくないです。」

聞いたら、許さなきゃいけないから。聞きたくない。

私の言葉を受けて、彼が言葉を止めて私を見ている。

私はやっぱり彼の顔が見れない。

うつむいたままでも彼の視線を感じる。

「今日黒川さんに何があったとか、どんなのっぴきならない事情があったとか、聞きたくないです。」

視線も合わさないまま、時間が過ぎていく。

「……本当にすみませんでした。」

なんて返事をしたらいいかかわからない。怒っても、どうしようもないのに。

沈黙の中で、私ができる事と言ったらオレンジジュースをすするくらいだ。

ふと顔を上げると、彼がタバコに火をつけていた。煙がこちらにとんでくる。

途端に頭に血が昇ってくる。

「タバコの煙、苦手なんです。」

辞めてください、とまで言えなくて、そう呟いてみる。

「すみません。」

慌てて彼がタバコを揉み消す。

何だかイライラが収まらない。

「体調悪いときにタバコの煙吸うとダメなんです。気分が悪くなるから。」

「すみません。今日、体調悪かったんですか？」

待ってる間に炎天下をふらふらしていたら体調が悪くなったんです、と言うのが何だか間拔けな気がして黙りこくる。

「嫌なんですよ、こうゆうの。」

「なにがですか？」

なにがですかじゃないだろう、こんなに待たされるのがだよ、と頭の中で叫ぶ。

他になにがあるってゆうのだ。

「体調悪いのに外で待つのも、タバコの煙があるところにいるのも、こんなに待たされるのも。全部嫌なんです。」

「喫茶店で待ってると思ったのですが……。」

「喫茶店は嫌だったんです。他に行くところもないし。」

「じゃあどこで待っていたいんですか。」

駅の裏のファミレスが頭に浮かぶ。でもファミレスでも2時間半なんて時間は潰せない。

「分かりません。」

「……すいません。」

何でこんなにいらいらいするんだろう。

「タバコ大っ嫌いなんですよ。」

何で吸ってる人より、周りの人の害があるのか分からないし。吸ってる人だけ早死にしちゃ悪いのに。」

怒りに任せて言葉がとまらない。

今日だけはタバコを吸わないでくれたらいいのに。

でも彼は、付き合った彼女にタバコをやめろといわれるくらいなら、その彼女と別れる、と前言っていたので、怖くて言い出せない。

「大体お店も分煙とかいうけど、タバコって結局空間を分けないと煙がくるし。」

体調悪いとどこも入れないんです。

タバコなんて吸う人の気が知れない。おかしいですよ。」

言いすぎだ、と後悔したのは、彼が声を荒げた瞬間だった。

「じゃあ、帰ってください！
確かに遅れたのは僕が悪いですけど、僕だって疲れているんです。
そこまで僕にあたられても困ります。今日は受け止められないです。
もう帰ってください。」

腕を掴まれて立たせられる。言いすぎた。怒らせてしまった。
遅れてきた今日くらい、目の前でタバコを吸わなくなっただっていいじゃない。

でも、私、かなり嫌な言い方をした。

「……。」

かばんを掴んでドアに向かって歩き出そうとする。

「お邪魔しました。」

彼の手が、私の腕を掴んだままなので、離して下さい、という風に
呟く。

「……帰るんですか？」

彼の疲れた声が響く。

「帰ります。だって帰れっていったじゃないですか。」

「帰りたいんですか？」

彼の声は、呆れているようにも聞こえる。

どうしたらいいか分からない。怖い。ここから逃げたい。それしか
思いつかない。

「どうしたいんですか？」

もう一度、彼が聞く。

「帰れって言われたんで、帰ります。」

俯いたままで呟く。

「赤ん坊じゃないんだから、少しは自分で考えてくださいよ。どうしてさっきから、こうしたいって自分の意見を言えないんですか？」

そんな態度でこれから先も生きていくんですか？あなたもう大人でしよう？」

きつい口調が響く。

彼のこんな口調を聞くのは初めてだ。

言われた事がまっとうすぎて反論できない。

そうだ、さっきから私は、彼がこう言ったからこうした、だから貴方のせいだ、としか言っていない。

でも、じゃあどうしたらいいのか分からない。

どうしてこんなにもうまくいかないんだろう。

「もう分かってるんでしょう？そうゆう態度が歳とともにたちゆかなくなってきたの。」

そんなのわかんない。わかりたくない。聞きたくない。遅れた理由なんて。

「帰るんですか？」

「だって帰って……」

「川島さんの意思はどこにあるんですか？ さっき飛び出して戻ってきたのにまた出て行くんですか？ 川島さんはどうしたいんですか？」

ちょっと強い口調に、何も酷い事を言われた訳ではないのに涙がにじんでくる。

こんな時に泣いちゃいけないと思うのに、やっぱり泣いてしまうのは自分に甘えているからだろうか。

目線があらぬ方向を向いて止まってしまふ。私は怒られるといつもそうだ。

ただ時が過ぎるのを待ってしまふ。

彼が私の腕を掴んでいる。どうして、掴んでくれるんだろう。

私なら、こんな馬鹿な女を引き止めたりしない。

だって、ここで引き止められたら私はまた甘えてしまふから。

何で彼は、他の人は、そんなに思ったことを素直にできたり、すらすらと思ったことを言えるんだろう。

私は言えない。言えた試しがない。できた試しも。

「さっきから僕の遅れた理由はどうして聞いてくれないんですか？

僕だって川島さんにいつも待ちぼうけくらってますけど、別に怒ったことないですよ？」

「……不公平ですよね。」

「どうしたいんですか？」

彼が私の顔を見つめてる。凄く嬉しいことのはずなのに、私は彼の顔が見れない。

何か言わなくちゃ。何か。

「2時半より前に、連絡がほしかったんです。」

「さっきからこうしてほしかった、ばかりじゃないですか、今どうしたいのか教えてくださいよ。どうして戻ってきたんですか？」
どうしたいのか、言いたくなかった。私の考えることは、いつだって勝手だと思うから。でも、さっきも今も答えは同じだ。君と一緒にいたい。帰りたくない。

「一人になりたくなかったんです。むかついてて、会話にならないのも分かってるけど、でも、このまま帰るのは嫌だったんです。」

「今、どうしたいんですか？」

「……頭が痛いので、ちよっと寝たいです。」

「……」

沈黙が怖い。怒らせたのは自分だけだ。

彼が、ふうつと息を吐いた。気がする。

「じゃあ、適当な時間になったら起こしますから、休んでください。僕あっちにいますから。」

先ほどの声のトーンと変わって、いつもの冷静な調子に戻っていた。彼は、意識して私の前でいらいを出さないようにしてくれているのだろうか。

何だか申し訳なく思う。

彼は、彼女にもこんな風に優しく話しかけるんだろうか。そう思うと、自分のことは棚に上げて嫉妬してしまう。

部屋を出て行こうとする彼のうしろ姿に話しかける。

「私、黒川さんが他の人と会ってると思うだけで、いらいらします。」

「……どうしてですか？」

「黒川さんを独占したいんです。」

息をするだけで、寂しさがこみ上げてくる。どうして、一緒にいるのに寂しいんだろう。

「今日は彼女さんはいらっしゃらないんですか？」

「今日は、お袋と二人で温泉に行ってます。本当は僕が行くはずだったんですけど、最近お袋がなんか参ってるみたいで、息抜きに行つて来いって送り出しました。」

彼が私の前で彼女の名前を読んだのは、初めてホテルに泊まった日の夜だ。

さくら。

さくらが知ったら嫉妬するんだろうな。

彼に名前で呼ばれる彼女が妬ましい。

彼の家で一緒に暮らす彼女が羨ましい。

彼の彼女に嫉妬する自分がいやらしい。

見たことも話したこともない彼女に嫉妬するってなんだか不毛だ。

別れ際も彼は謝ってくれた。今日は本当にごめんなさい。

私はいえなかった。

ごめんなさい。

やっぱり今日も、いえなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4835e/>

待ち合わせ

2011年1月28日02時48分発行